

ハイデルベルク信仰問答より

問 63 この世の生においても、来るべき世の生においても、それに報いてくださることが神の御旨であるのに、私たちの良き業は何の値打ちもないのですか。

答え その報酬は功績によるのではなく、恵みによって与えられる（ルカ 17:10）ものであります。

先の間 62 では、「なぜ、私たちのよい業が、神の御前で私たちの義となり、少なくとも、その一片にもなりえないのでしょうか」という問いに対し、「神の裁きの前に立ちうる義は、全く完全であり、徹頭徹尾、神の律法と一致するものでなければならない」「しかし、この世の生で、私たちの最上の業でさえ、すべて不完全であり、罪に汚されている」という答えが返ってきました。

この質問者は、「神は良い業に対して報いるはずの方だ（そうでなければならない）」という前提に立って更に反論を続けます。まず、質問者がそのように考える理由を探ってみましょう。その念頭にあるのは、おそらく神の「善性」でありましょう。神は良いことも悪いことも正しく裁かれるお方である。そして、人間が蒔いた種は、何らかの形で刈り取りをすることになる。良い種を蒔けば良い実を収穫し、悪い種を蒔けば悪い実を収穫する。この真理に立ち、では「良い種」を蒔いた結果刈り取った「良い実」について、神は何の評価もなさらないのかと問うているのです。

この問いに対する答えは明白です。我々が救われるために意味をなした「良い業」は一つもありません。しかし、救われた人が感謝に溢れて隣人に示した愛の業は「天に宝を積む」ものとなります。救いとは一方的な神の「恵みによって与えられる」ものであり、その恵みに人は参与しえないのです。人は恵みに何かを付け加えることはできません。しかし、恵みにあずかった人は、「報い」を求めることすら忘れて無心に神と人にとに仕えるようになるのです。もし神が人に報いを与えてくださるとしたら、それは私たちが自分でも気づかずに行なっていた「愛の業」なのかもしれません。地上では誰にも気づかれず粛々と行なわれていた愛の業、誰も知らないところで神との関係の中でささげられた祈りです。主イエスは次のように言っておられます。

また、祈るときは、偽善者のようであってはならない。彼らは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈ることを好む。よく言うておく。彼らはその報いをすでに受けている。あなたが祈るときは、奥の部屋に入って戸を閉め、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。（マタイ 6:5-6）

改めて問 63 を読み直してみると、「それに報いてくださることが神の御旨であるのに」という質問者の前提は、ずいぶん乱暴にも聞こえてきます。まずは「報いは与えられて当然」という意識を捨て、恵みに立ちましょう。救いに入れていただけるだけでも十分なのです。そして、神と人に仕えることは「礼拝生活」なのですから、自分の報いなど求める余地もないはずです。この贖われた人生を如何に主に喜んでいただけるように用いていくことができるか。そこに集中すればよいのです。しかし、私たちが自分を捨てて主に仕えていくとき、もちろんそれに対するすばらしい報いが用意されていることでしょう。